安全衛生あれこれ 61

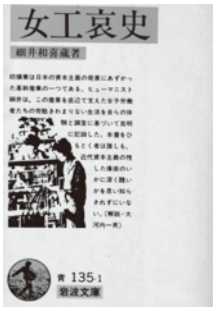
増田労働衛生コンサルタント事務所
所長　増田稔久

労働バイブル本『女工哀史』
～今年刊行100年～

労働と安全衛生分野のバイブル本の一つに細井和喜蔵著『女工哀史』（改造社のち岩波文庫）があります。大正14年（1925年）に刊行され、今年、刊行100年の節目を迎えました。本書は著者が繊維工場で職工として働いた経験と調査により記録された労働現場のルポルタージュです。

序文には「この本は、紡績工場で働く300万人の女工の生活記録である。およそ衣類を纏（まと）っているものなれば何人も一読する義務がある。自らの体を犠牲に『愛の衣』を織りなし社会の礎となった『人類の母』である女工たちに感謝しなければならない」（抜粋）と記されています。近代日本がこのような苛酷な労働により始まり、戦争を経て、安全第一を当たり前とした社会に発展し、今があるのだと思います。

本書に記された当時の労働災害の事例を紹介します。著者はこのような災害で何人何百人殺されたか分からないと語っています。現在は安衛法令等により同種災害の防止が進められ、その努力は今も継続中です。カッコ書きは労働安全衛生規則の参考条文です。



細井和喜蔵著『女工哀史』（岩波文庫）の表紙

【事例1】ミュール精紡機は装置がレールの上を走行するが、走行路で少女工が清掃しているのに、組長が誤って運転スイッチを入れ機械に挟まれた。（第104、107条）

【事例2】リング精紡機は高速回転するローラーを有し、動力を伝達するバンド紐が掛かっているがよく切れる。そこで少年工が機械を止めずに運転中に掛け直す。その時に腕、体を巻き込まれた。（第102、107条）また同機械で、少女工が機械の下に落ちた木管を拾うため作動中のローラーの下に潜り込み、ローラーに巻き込まれた。（第101、109、144条）

【事例3】力織機（りきしょくき）でシャットルが飛んで女工の顔や体に激突した。（第145条）

【事例4】繊維工場で蔓延した肺結核がある。高い発病率と死亡率であった。若年齢、工場の高温度と高湿度、衣食住、深夜業などが影響した。また流産や死産の発生率も平均を超えていた。

▽

事例の機械がどのようなものかは、明治村などの博物館でご覧出来るのではないでしょうか。また、別掲のとおり手元にある女工哀史に関連する書籍を整理しました。これらの古典等にも触れ労働災害防止に一層努めてくだされば幸いです。

（別掲）

刊行年	書名	著者	概　要
1903年（明36年）	職工事情	官庁刊行物（1998年犬丸義一校訂　岩波文庫）	工場法（最初の労働立法で労基法、安衛法の前身とも言える）成立の基礎資料となった。
1925年（大14年）	女工哀史	細井和喜蔵	切ない響き「女工哀史」を知らずして労働は語れない。
1931年（昭6年）	富岡日記	和田　英	1873年から2年間、官営富岡製糸場の伝習工女。後に長野県製糸場の教授。武士の娘による自身の記録である。
1968年（昭43年）	あゝ野麦峠	山本茂実	結核で帰省する女工みねは「飛騨が見える…」とつぶやき亡くなった。
1972年（昭47年）	サンダカン八番娼館	山崎朋子	底辺女性史、海外売春婦「からゆきさん」の記録。女工以上の苛酷な労働。